

ユイスマンスの回心

岩 淵 邦 子

神秘体験の有無

ユイスマンスの回心に関する詳しい事情は1895年、パリの出版社、Tresse et Stock より刊行された『出発』(En Route)にうかがうことができる。始めに、この作品におけるユイスマンスの分身はデュルタルであることを断わっておかなくてはならない。

さて、まず我々の第一の興味は、回心に先立って彼に何らかの神秘体験があったのかなかったのかという点に集中する。回心に関する自問自答に注目してみよう。

どうしてはくはカトリック教にもどったのか、どんな経路でそこまで行ったのか？

デュルタルはわれとわが問いに答えて、——それは自分にもわからぬ。わかっているのは、何年か懐疑のうちに暮らしたあとで、急に信じてしまったことである¹⁾。

実は彼自身、回心については世間並みの先入観念を有し、ダマスコへの途上パウロにおこったような、「精神の急激な動転や電撃的な覚醒」を、あるいは、「徐々に辛抱づよく耕された素地」に最終的に信仰が花開く場合をひそかに期待していたのだった。しかし事實は違った。

(…) それ以外に第三の方法があるにちがいない。それは恐らくもっとも普通のもので、現に救い主がほくに対して行なった方法である。それが真実どうい
うものであるか、ほくにもよくわからないが、全く意識しないうちに働いてい
る胃の消化作用のようなものである。ダマスコへの道もなければ、発作を起こ
させるような事件もない。何かが突発するでもなく、ただある朝眼を覚ますと、
なぜかわからず、事が行なわれてしまっていたのである。²⁾

デュルタル＝ユイスマンスは全く予想外の「靈魂のこの不意の転換」に
驚きつつもそこに「聖寵の大きな働き」を推定せざるを得なかった。ふり
かえてみれば確かに回心に至る要因は種々あった。すなわち、芸術への
嗜好、遺伝的傾向、生活の倦怠、少年時代の修道院訪問から受けた印象、
教会通いの中から把握したもの等々である。しかしそれら諸要因を「ひと
つに集め、一束につかねること」をしたのは神の仕業としか考えようがない
と彼は述べる。「心のなかで突然行なわれた光の無言の爆発」、「一晩に
して不信者が信者になった」不思議を解明しようにもデュルタル＝ユイスマ
ンスには何の手がかりもない。彼はあれこれ思案し、マリアの介入を想
定してやっと一応の納得に辿りつく。

この場合、われわれに働きかけるのが聖母マリアであることは確かだ。われ
われを握ねまわしてキリストの手に渡すのは、マリアである。しかし、彼女の
指は非常にしなやかで、やさしく、その手掛ける魂は何も意識しないのである。³⁾

このように彼自身にとってもその回心の経緯や段階はわからずじまいで
あったことが明瞭に述べられている。そのことの確認と共に、ユイスマン
スの熱烈なマリア信仰の主要原因が、不可思議な回心をめぐる事情にかか
わって発していることも我々はここで確認しておくべきだろう。

推量される回心の動機

これについてユイスマンスは三つあげている。すなわち、遺伝の復活、生活の嫌悪、芸術への情熱、である。以下一つずつみてゆこう。

1) 遺伝の復活

この項でデュルタル＝ユイスマンスは方々の修道院に修道女として入っていった従姉妹や伯母たちのことを想起している。彼女達に会ったのは30年も前の少年時代のことであり、幼なかった彼は修道院に面会にゆく父母に伴なわれて否々行ったのだという。神に仕える身として彼女達には一切の化粧気がなく、紅をささないその色褪せた唇は、帰りぎわに額に受けた接吻の冷たい感触と共にくっきりとした印象で彼の脳裡に焼きついたのだった。彼女達の習い性となった低い話し声、又、彼女等の気質そのままに柔和ではあるが人をたじろかせる程に直視する瞳は幼い彼を不安な心持ちにさせたのだった。

『彼方』(Là-Bas)を執筆中、ジル・ド・レーその人に“悪なるもの”の顕在化を見たユイスマンスは、遠い少年時代に会った彼女たちにこそ“善なるもの”が顕在化していたことを今更のように悟ったのではないだろうか。彼女達の瞳は、思えば一切の虚偽を容赦しない“善なるもの”の威厳と迫力に満ち満ちていた。おそらく少年時代に刻印された“善なるもの”のイメージが、『彼方』執筆で“悪なるもの”の探究に倦み疲れた時その心に鮮やかによみがえったのだらう。少年の頃は厭でたまらなかつた修道院訪問が、今はその豊かな樹木にあふれた院内の庭園のたたずまいと共にすっかりなつかしく好ましいものとして思い起されたのである。

この項、デュルタル＝ユイスマンスの心の動きはよく了解できる。ところで彼はこれを称して「昔の敬虔な家族の遺伝の復活」といっているのであるが、一体何故ここで“遺伝”という言葉が使われるのであろうか。今

日の我々はこのような場合にわざわざ“遺伝”などという言葉を持ち出すだろうか。せいぜい述べても“一門に特有の精神的傾向”くらいのことではないだろうか。ある家系にみられる身体的生理的特徴を指摘する時は確かに“遺伝”という言葉を我々も使う。そしてそういう場合に限定されていると思う。精神面、しかも信仰に関することも“遺伝”で説明しようとするユイスマンスに19世紀的なものを強く感じる。

2) 生活の嫌悪

この項ではまず二人の親友の喪失が語られる。

彼は以前誰彼の別なく友情を結び、自分の魂とは何の関係もない魂たちの壁土をぬぐってきたが、やがてそうした無用の散策に倦きて、交際の中心を定めた。そして、悪魔憑きや神秘学などに傾倒する医学博士デ・ゼルミーとサン・シュルピス教会の鐘つきで、ブルターニュ生まれのカレーの兩人と固い友情をむすんだのであった。

この二人との友情は、今までの表面的のお体裁を飾った交際とは格段の違いで、広く、深く、思想の類似や魂の固い連繋にもとづいていた。ところが、せっかくの友情が急に断ち切られた。デ・ゼルミーとカレーが僅か二か月のあいだに相継いで死んでしまったのである。前者は腸チフスにたおれ、後者は塔にのぼってアンジェラスの鐘を鳴らしてから、悪感がすると言って床にひたひた死んでしまったのである⁴⁾。

ここで我々は文面通り、デュルタルが二人の親友を失くした話、と単純に受け取ってよいのであろうか。ここでは、デュルタル＝ユイスマンスの関係はどの程度事実¹⁾に則しているのが急に不透明になる。別様にいえば、ここで我々はデ・ゼルミーとカレーのモデルが誰であるのか穿鑿^{せんさく}したくなるのである。何より驚くのは、作家、ユイスマンスがここに至って急にデ・ゼルミーとカレーをなきものにしてしまうことである。彼等が現実の誰々

と対応し、何故ここで二人が同時に抹殺されてしまうのか非常に興味深いところである。

デュルタルがこの二人の親友の死去を報告したあと文章は次のように続く。

それはデュルタルにはひどい打撃であった。抛りどころのなくなった彼の生活は、岸をはなれた小舟のように、当てもなく漂流しはじめた。そして、風のまにまにさまよったが、今さら新しい友人をつくる年でもない彼にとって、こうした孤独が致命的なものであることはよくわかって⁵⁾いた。

モデルの穿鑿が不可能な一般読者ならば、親友喪失という事態のみを受けとめ、それにひき続く孤独地獄を了解すればいいのだろう。しかし、モデルの穿鑿も許される一研究者としてはどうしても気になる箇所である。R. Baldick はこれに関して次のように明快な説明を与えている⁶⁾。

すなわち、『彼方』の第一章で文学を論じあうデ・ゼルミーとデュルタルは実はどちらもユイスマンスの分身なのである、と。そう明かされてみれば大いに納得のいく箇所がある。それは『彼方』の第二章で述べられるデュルタルとデ・ゼルミーが互いに初めて知り合う^{くだり}件である。

場所は、「奇妙なキリスト教史家」、シャントルーヴの客間。シャントルーヴは、「あらゆる社会の人々を食卓に招くことを誇りとする」客好きの男で、冬になると「毎週一回ずつ」バニュー街の自宅で夜会を催すのだった。常連の中には、「美しいというよりちょっと異色のある」その妻、シャントルーヴ夫人が御目当てで通ってくる者も相当数いた。そんな夜会の席でデュルタルはデ・ゼルミーに気付いたのだった。デ・ゼルミーは夜会に集まった学者、詩人、新聞記者、女優、劇場関係者等雑多な人々の中でその「端正な容貌と態度」でひときわ目立つ存在であった。ロンドン仕立てのぴったり身に合った服の着こなし、手袋の着脱等、全てになかなかのダンディぶりが見てとれた。そして長々とデュルタルによるデ・ゼルミーの人物鑑定が

始まる。要約すれば、デ・ゼルミーなる男は、気心の知れぬ者には冷たく辛辣に振るまうので大いに人から怖れられたり嫌われたりするるのであるが、親しくなってみると、実に親切で信頼できる人物だ、というのである。バルディックが示した種明かしにより、これら全てが実はユイスマンスが自分自身に下した客観描写の試みであり、最終的な自己評価の言葉だったことが明白となる。

バルディックは、デ・ゼルミーの唐突な消滅については次のように解釈する。すなわち、デ・ゼルミーは『彼方』の第一章に位置づけられる、痛烈なゾラ批判を含む自然主義文学論を議論の体裁で示したかったためだけに設定された人物に過ぎない。従って、彼はこの第一章のみで、そのになわされた役割を基本的には果し終えているわけであり、事後いつ退場してもよかったのである。それで『出発』では早々と御都合主義的にその死がもたらされたのであると。

しかしながら、個性的な風貌を与えられたデ・ゼルミーは、作中、友情論が語られる場でもその存在が効果的に作用しており、又、デュルタルにカレーというもう一人の親友となるべき男をひきあわせるなど、『彼方』では存在感のある、かなり面白い人物に仕上がっていたのが注目される。

さて、現実のユイスマンスの状況は次の通りのものであったのだろう。

文壇から遠ざかって以来、彼の身辺は非常にさびしいものであった。それゆえ、彼の生活は退嬰的になって孤独の中に硬直していた。⁷⁾

結局、デ・ゼルミーは、孤独地獄に悩むユイスマンスが夢想した、現実には不可能な“理想の友”の姿を示しているものと思われる。

強烈な個性を付与されたデ・ゼルミーに対し、他方のデュルタルは、対照的なまでに地味な性格の持主として描かれている。すなわち、彼は「質朴一方で、極端なところのない落ち着いた気性の男」なのだ。しかし、ユイスマンスの作品世界では、デ・ゼルミーの方は早々と退場させられたの

に対し、デュルタルは生きながらえて、ユイスマンスが生みだした分身の中でも最もユイスマンス自身の本質に迫る人物像を示すことになる。バルディックは、デュルタルという名前の由来に関して次のようなエピソードを紹介している⁸⁾。

当初、ユイスマンスは『彼方』の主人公のためにリュナンという名を考えていたのであるが、たまたま知り合いの医者、Michel de Lézinier との会食中、Lézinier からデュルタルという名の田舎町があることを聞き、その名がとても気に入り早速それを『彼方』の主人公の名前として採用したのだという。ちなみにユイスマンスは、いつも作中の登場人物に名前を与える際、フランスの国鉄の駅名を利用していたという。

カレーについてデュルタルが最初に得た人物像は、デ・ゼルミーが語った次のような言葉から得たものであった。「(…) まああのカレーに会ってみたまえ。おそらく珍無類の奴だと思ふことは請合いだよ。非常に聡明で、決して偽善的なことのできない、文字どおりのキリスト教徒だがね、羨望も憎悪も知らない貧乏人だよ」

バルディックによれば、カレーも又、複数の要素を人為的に合成してつくった人物であるが少なくとも一部は実在した人物の特徴を写していた。

ユイスマンスは Gil Blas に《L'accordant》というタイトルで記事を書くために、1888年の冬、サン・シュルピスの鐘楼を訪れ、当時そこで鐘を撞いていた男に面会したのだった。当該記事は、翌年の1月18日に Gil Blas に掲載されたのであるが、ユイスマンスは取材に訪れたサン・シュルピスの鐘楼とそこで会った鐘撞き男の印象が余程強烈であったのだろう、それを『彼方』執筆に際し再びとりあげたのであった⁹⁾。

とりわけ鐘楼内部の「宙にかかった井戸枠のような木組」は彼の脳裡にこびりついたらしく、『仮泊』(En Rade) で、ジャック・マルルがみる三つ目の夢の中にも重要なモチーフとなって現われるものである。

鐘楼の内部は上方も下方も深淵の様相を呈し物慣れないユイスマンスは

「空洞に呑みこまれそうな」恐怖感を押えることができなかつた。しかし、そんな危険な場所を、鐘撞き男は自分の仕事場と心得、愉しげに自分の任務にいそしむのであつた。それを眺めたユイスマンスの描写は迫真性に富んだものである。

なにひとつ動くものがなかつた。しかし、風は反響板の傾斜した薄板を吹きならし、木組の籠に渦まいて、階段の螺旋のなかに吠えたけり、緑の反りかえつた大釣鐘のなかに吹きこんでいった。突然、空気のそよぎが、かすかな風の無言の息吹が、両方の頬をかすめた。彼は振りあおいで見た。ひとつの鐘が北風にさからって、振動はじめたのだ。とおもうと、たちまちその鐘が鳴りだして、ごうごうたる響きをあげた。巨人の杵きねのような鎚が、青銅の乳鉢のなかで、凄まじい音をつきだした。塔はみりみりと震動した。彼の立っていた床板の端は汽車のデッキのようにおどつた。連続した物すごい轟きが、碎かんばかりの鎚の打音に絶たれながら、のたうちまわつた。

彼は塔の天井をあちこちと捜してみたが、人影も見いだせなかつた。しかし、最後に、虚空に投げだされた足があつて、おのおのの鐘の下部に連結した踏み板のひとつを踏みかえしているのを、ちらりとみとめた。そこで、厚い床板にほとんど身を伏せるようにうつむいて、ついに鐘撞きの姿を見ることができた。鐘撞きは二つの鉄のかすがい 銚かすがい に両手でつかまつて、天を仰ぎながら、深淵の真上で身体を揺りうごかしていた。¹⁰⁾

鐘撞き男の仕事ぶりにも増してユイスマンスは男の顔色をみて衝撃を受けた。

(…)それは中世の閃人の血の気のうせた鉛色の顔色であつた。じめじめした土牢や風の通らない修道院の地下牢に、死ぬまでとじこめられた人間の顔色で、現代人のまったく知らない色艶であつた。¹¹⁾

カレーの容貌は確かに1888年の冬にユイスマンスが会った鐘撞き男のそれを借用しているのであろう。しかし、その男にはカレーの有する鐘に關する深い学識は欠落していたし、先述した取材以来、しげしげと訪ねてくるユイスマンスに彼が人間的親しみを示した形跡もない。かえって、彼の娘目当てに通って来るのだらうと誤解してユイスマンスを邪険に追い返したりする始末であった。¹²⁾ すなわちカレーも又、美化され、現実にはあり得ない人物像を示しているのである。とすれば、結局、現実のユイスマンスには、彼の理想に叶った親友といったものは全く存在しなかったわけであり、デュルタルが二人の親友を失った時点でようやく、デュルタル＝ユイスマンスの関係が成立することになる。

3) 芸術への情熱

さて、こうしてようやく生身のユイスマンスとの接点を回復したかに見えるデュルタルは、「人との交際を断って、ただひとり書物の中で暮らしたのであった。仕事と著作のみが孤独地獄に落ちた彼を救い得た。仕事も著作もなくぼんやりしていると、「裸形の女の群れが讚歌の調べにつれて乱舞する、ほとんど幕の変わらない夢幻劇」にうなされ、身心の生気を吸いとられてしまうような激しい疲労感におそわれるのが常だった。

実は、それから逃れるためにこそジル・ド・レーの一代記(=『彼方』)は書かれたのであったことがここで判明する。それを脱稿するとたちまち今度は「題材の品切れ」に悩まされることになった。次の一節には、ユイスマンスが『腐乱の華』(Sainte Lydvine de Schiedam)を執筆するに至る事情が読みとれて興味深い。

元来、彼は芸術に関して極端な人間であったから、すぐに極端から極端へ走って、ジル・ド・レー元師の物語のなかで中世の悪魔礼拝をしらべたあとでは、もはやある聖女の生涯よりほかには、興味をもって穿鑿せんさくすべきものを見出さなかった。ゲレスヤリベの神秘学に関する研究のなかに発見した文章が彼をうな

がして、至福なる聖女リドヴィナの事蹟に、新しい文献をもとめて分け入らせた¹³⁾。

しかし彼は突然、問題は文献探しに尽きるわけではないことに思い当たる。すなわち、「一人の聖女をえらび出して作品の中に復活させようとするなら、真にはつらつたる信仰を有し、主人公の聖性を確信する」ことこそ肝要なのだ、ということに思い至ったのである。今更のように、「聖ジュリアン・ロスピタリエの伝説について見事な作を物した」ギュスターヴ・フローベールの失敗、又、エルネスト・エローの『聖者たちの風貌』の失敗が思い起された。前者は、「肝心の信仰を欠いていた」ことが命取りになり、後者では、「芸術性の貧困に災され」ての失敗例を示していた。そこで、両者の二様の失敗に学んで、デュルタル＝ユイスマンスは心をひきしめる。「ぼくは同時に二人であると共に、自分自身の特質をも失ってはならない。さもなければ、聖女リドヴィナに専念する必要がなくなる。むしろ黙っている方がまだ」と。このように次なる創作に向けて彼は激しい意欲をたぎらせるのであるが、その一方で、我ながらあまりにも高い目標を掲げてしまったことで早くも絶望的な気分には陥るのであった。

ショーペンハウアーから教会へ

『出発』の作中にみられる conversion という言葉についてはいろいろの訳語をあてることが可能である。すなわち、“改宗”，“回心”，“転向”，“帰依”等。訳者、田辺貞之助は“改宗”の訳語を採用しているのであるが、何から何への改宗であろうか。ここで思い出されるのが、回心以前、デュルタル＝ユイスマンスをとりこにしていたショーペンハウアーの思想である。

まさに彼は長らくショーペンハウアー教の熱烈な信徒であったといえる。ではどのようにして彼はショーペンハウアーの思想から離反していっ

たのであろうか。『出発』の作中に手がかりとなる言葉を探してみよう。

以前は、憂愁の嵐が吹き荒れるときにも、船をもやう杭があったので、ぼくはこの港 (=教会)¹⁴⁾ を軽蔑していた。自分の小説を信じ、歴史上の著作に専念し、芸術をもっていた。しかし、今ぼくはそうしたものがわれわれを幸福にするためには全く不十分であり、全然不適當であることを悟り得た。したがって、厭世思想というものは真に慰められる必要を感じない人々を力づけるためにしか役立つないと理解した。そして、その理論は、金持ちで丈夫なものには魅力があるが、年をとって持病がはじまり、すべてが崩れはじめるころになると、呆れるほど無力に、情ないほど虚偽になることもわかった。¹⁵⁾

おそらくこの一節ほどデュルタル=ユイスマンスのショーペンハウアーへの愛想尽かしの理由が明確に述べられている箇所はないであろう。そして、ショーペンハウアーを見限った時、彼の目に長らく等閑視してきた教会がその真の姿を現わし始めたのであった。

単純な人々につけ込み、安易な幻想を与えることによって彼等を欺き瞞着するものとばかり見なしていた教会は、意外にもショーペンハウアーにもまして人生の悲惨な実相を直視していた。

教会は靈感によるすべての書物を通じて、運命の恐怖を叫び、避けるすべもない生活の苦斗を泣く。集会書、伝導書、ヨブ記、エレミアの哀歌集などは、一行ごとにこの苦悩を証明し、中世もまた『イエス・キリストのまねび』において、人生を誼い、大声に死を求めている。

教会はショーペンハウアーよりもずっとはっきりと、この下界には願うべきものも期待すべきものも何ひとつないと断言する。¹⁶⁾

次の点によって、デュルタル=ユイスマンスは教会を見直し教会に惹か

れた。

(…) 教会は哲学者の調書が終った地点から更に進んで、官能の限界を越え、目的を啓示し、結末を明らかにする。¹⁷⁾

デュルタル＝ユイスマンスはショーペンハウアーに眩惑されて、苦悩に満ちた現世を全て造物主のせいにしていた。しかし、冷静に考えてみれば、責めるべき点は全て人間の側にあることを納得した。

結局、人間理解の深さにおいてショーペンハウアーは教会が達成していた水準にはるかに及ばなかったのだ。人間としてのプライドを失いかける程、人生に疲れ傷ついた時、デュルタル＝ユイスマンスはそのことに気付いたのだった。

そこでぼくは魂の病院である教会へ行った。この病院では少なくとも部屋に入れてベッドを与え、手当をしてくれる。厭世主義の療院のように背を向けて立ち去りぎわに、われわれを苦しめている病気の名を教えるだけではない。¹⁸⁾

芸術による導き

芸術はデュルタル＝ユイスマンスにとり、「人生に対する嫌悪以上に、彼を神のもとへ引きよせる不可抗な力をもつ磁石」として作用したのであった。

時間をつぶすために、好奇心から教会に入って、歌手が墓掘り人足のように交代で一シャベルずつ詩節を投げとばすあいだに、死者の晩祈が重々しく一語ずつ落ちてくるのを、何年ぶりかで聞いていると、底の底まで魂を動かされる思いがした。¹⁹⁾

亡魂供養の連祈、聖週間の典礼とグレゴリオ聖歌はデュルタル＝ユイス

マンスを圧倒した。感動のあまり「信仰を拒もうとする心中の企てが消え去る」ような思いを味わった。それがきっかけとなって彼は教会めぐりを始めたのだった。しかし、典礼がない時、教会は殺風景な場所に過ぎず、乞食女が入り込んで居眠りしていたり、あるいは逆に観光客がつめかけていたりする。それを見るとたちまち教会に寄せる彼の熱い思いは冷えこわばるのであった。そんな時は、ルーヴル美術館に足を運び、そこに収蔵されているプリミチフ派の絵にこよない慰めを見出すのを常とした。デュルタル＝ユイスマンスはパリ中の教会を物色して歩き最終的に次の結論を得る。すなわち、儀式と聖歌が素晴らしいのはサン・シュルピス教会、中世教会の名残りを多分に留め、心底からくつろげ真面目に祈る気持ちにさせてくれるのはサン・セヴラン教会であると。とりわけ彼はサン・セヴラン教会を愛した。『出発』作中では、この教会に対して惜しめない讃辞がふり注がれている。デュルタル＝ユイスマンスは二つのこの愛好する教会でキリスト教芸術に開眼させられ、「次いでその芸術が彼を神へと誘った」のである。

しかしこの経過は時として自身の回心の真面目さを疑わせ、厳しい自己批判が彼をおそうのだった。

ぼくは結局、芸術だけのために教会へ引きつけられたのであって、ぼくが教会へ行くのは、見たり聞いたりするため、祈るためではない。ぼくは主を求めずに、自分の快樂だけを追っている。……(中略)……教会でもぼくの情熱は身体を動かせば忽ちぐらつくのである。広間にいると火のように燃えるが、前庭ではよほどさめ、外へ出るとまるで凍ってしまう。それは文学的請願、神経の顫動、思考の暴挙、精神の喧騒、その他何とでもいえるが、要するに信仰ではない。²⁰⁾

これは実は、リュシアン・デカーヴも疑念を隠さなかった点であり、今なお議論の尽きない問題である。

註

- 1) ユイスマンス (田辺貞之助訳) 『出発』 桃源社, 昭和50年 第一部第二章より
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 同上
- 5) 同上
- 6) Robert Baldick: *La vie de J.-K. Huysmans*, traduite de l'anglais par M. Thomas, Denoël, 1975, p. 199
- 7) 註1)に同じ
- 8) 註6)に同じ
- 9) 同上 p.198
- 10) ユイスマンス (田辺貞之助訳) 『彼方』 桃源社, 昭和41年 37, 38頁
- 11) 同上 38頁
- 12) 註9)に同じ
- 13) 註1)に同じ
- 14) 本稿筆者, 岩渕による補足
- 15) 註1)に同じ
- 16) 同上
- 17) 同上
- 18) 同上
- 19) 同上
- 20) 同上